

＜日本イギリス哲学会 第64回関西西部会例会 報告要旨＞

報告1：後期ウィトゲンシュタインにおける「像(Bild)」を中心とした解釈の批判的検討

立場 貴文

近年、複数のウィトゲンシュタイン研究者の間で後期ウィトゲンシュタインの哲学を「像(Bild)」の概念を手掛かりにして解釈するという試みがみられる(大谷 2020、古田 2020)。この解釈の特徴は、まず言語の働きや私たちの行動について、私たちは知らず知らずのうちに特定のイメージ(=像)を用いてそれらを捉えることを指摘する点にある。さらにそれらのイメージが示す方向の多様性や役割を吟味することによって、哲学は我々の混乱を解消すると主張する。また、こうした哲学を現実の他者との日常生活の会話において実践することまで企図している。

本発表の目的はこうした試みを批判的に検討することにある。ポイントは以下の二点である。第一の点は、『哲学探究』における対話を、現実の他者との対話まで敷衍することが可能なのかという点である。第二の点は、『哲学探究』において批判されている言語の像と、私たちが日常の会話において暗黙の裡に前提している規範とを類比的に論じることは正当なのか、という点である。これらの検討を通じて、『哲学探究』における対話者のあり様、および「像」とは何かということを明らかにする。

(京都大学大学院 文学研究科 博士後期課程)

報告2：エドモンド・バーク『フランス革命の省察』における2つのフランス革命観

貴 龍太

思想史研究におけるコンテキストの重要性が強調されるようになって久しいが、ここでコンテキストとは史実や論敵の議論そのものではなく、それらに関する思想家・政論家の主観的な認識である。エドモンド・バークの主著『フランス革命の省察』(1790)における政治・社会思想を解釈するためにはフランス革命をコンテキストの一つとして意識しなければならないのはほぼ自明だが、その際にもバークが主観的に把握したフランス革命すなわちバークのフランス革命観が理解される必要がある。

そのバークのフランス革命観についてJ.C.D. Clarkによれば、バークはフランス革命を、一方では絶対君主政から制限君主政へのあり得たはずの穏健な改革の不運な失敗として解釈しつつ、他方で啓蒙思想家によるフランス政治社会の道徳的紐帯の解体がもたらした必然的帰結としても解釈しており、これら2つのフランス革命解釈は「解決しえない緊張関係」にある(Clark 2001, p. 69)。本報告ではClark説を批判的に継承し、『省察』におけるバークの2つのフランス革命観の相互関係とその含意について考察する。

(京都大学大学院 経済学研究科 博士後期課程)

報告3：ヒュームにおけるコンヴェンションと党派の関係について

森 直人

本報告では、ヒュームにおけるコンヴェンションと党派 *factions* の関係を検討する。これについて Sabl (2012) は、党派を「擬似コンヴェンション」の一種と捉え、それが（根本的な）コンヴェンションへの脅威となるが、この脅威は克服可能だと論じる。壽里は Sabl へのコメントで、この 2 つが互いに見分け難いことなど幾つかの問題を指摘したが、これに対する Sabl の応答はやや不十分に見える (Susato [2015]; Sabl [2015])。

これを踏まえて本報告では、党派が持つ危険性と、その「擬似コンヴェンション」的性格を改めて考察する。報告者のヒューム読解では、統治のコンヴェンションや優れた国制でも党派を抑制することはできない。さらに壽里の言う「見分け難さ」に着目し、その要因がコンヴェンションと党派の間の極めて(Sabl の想定よりさらに)類似した心理学的構造にあると捉える。以上を通じて、ヒュームにおいてコンヴェンションが党派を克服しうる保証は見出せないという結論を導きたい。

(高知大学)